

—ものづくり・商い・もてなしのまち京都—

(1) 伝統産業を支える地域

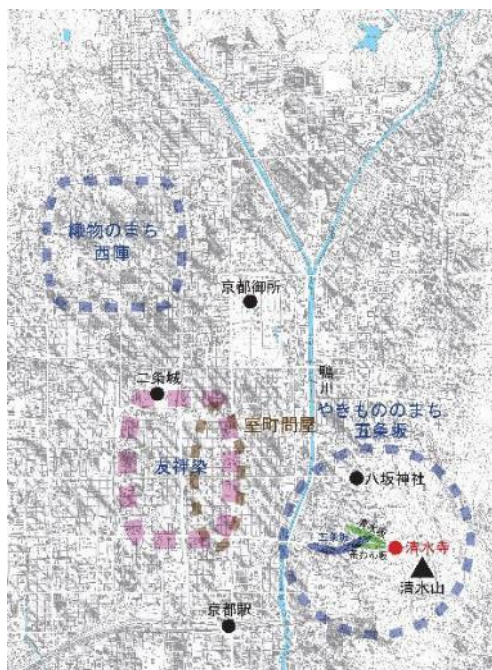


図2-35 伝統産業を支える地域

京都の産業は、日本の政治・経済・文化の中心地として栄え、情報や物資が交流する中で、町衆が自由に活動することにより生まれ、京都の四季の移ろい豊かで風光明媚な自然環境の中で培ってきた美意識によって育まれてきた。

今日、そのうちの多くは伝統産業として受け継がれている。また、伝統産業による製品のうち17品目は、伝統的工芸品として国の指定を受けたものであり、その数は全国で一番多い。京都は、多くの伝統工芸品を作り出す力が集積することによって、更に新しい伝統工芸品を生み出す力を持つ都市といえる。

また、伝統産業からスタートして、そのコア技術や培われた美意識を活用して先端産業に生まれ変わり、時代の先端を走る企業の出現にも枚挙にいとまがない。こうした先端産業は、直接、海外とビジネス展開を行い、京都から本社を東京に移すことがない。これは大阪生まれの大企業の行動パターンとは大きく異なる。

この項では、今なお発展を続けている京都の伝統産業の原点であり基盤であり、発展の支えとなっている地域の歴史的風致を示していく。

ア 具体事例

(7) 五条坂・やきもののまち

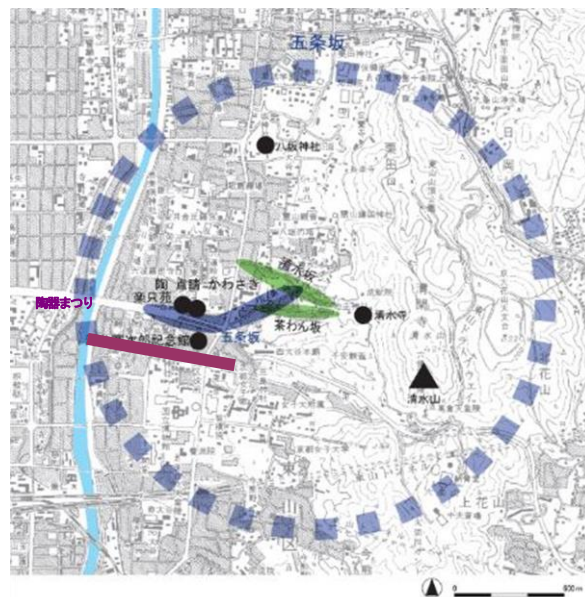


図2-36 五条坂・やきもののまち

現在五条坂^{きよみず}という、東大路から清水坂へ至る部分の名称としてよく使用されるが、かつては、現在の五条通の大和太路から清水坂との交差点あたりを示していた。清水寺から現在の東大路通に下っていく通りが清水坂と呼ばれ、清水坂から分かれ、五条通へと下っていく通りは五条坂と呼ばれ、いずれも清水寺参詣道であった。清水寺への参詣客が、五条坂や五条坂に平行した形で清水寺に続く茶わん坂に軒を連ねた京焼・清水焼の店舗は、この町の清水焼の歴史をしる。のぼせる。

五条坂、茶わん坂はともに清水山の西側の麓に位置し、清水寺から東山五条に至るまでは急な傾斜地となっている。また、東山五条から五条通沿い、五条大橋に至る間は緩い傾斜を持っている。清水焼の登り窯は、これらの傾斜を利用してつくられている。現在、五条坂地区には、いくつかの登り窯が現存している。このうち、河井寛次郎記念館(旧河井寛次郎邸)登り窯(国登録有形文化財)や旧藤平陶芸登り窯などは、保存が図られている。

清水焼は慶長年間(1596~1615)の開窯^{かい}とされ、江戸時代中期には五条坂もまた、清水焼の生産地となっていたとされている。尾形乾山(1663~1743)が記した「陶工必用」

(元文2年(1737))には、「遊行土 洛東松原通(現東山五条)ノ野辺ニアリ」との記述があり、清水焼が洛東の陶土を主原料としたことはほぼ確実であり、よい土がとれたという地質的条件もここで製陶業が栄えた条件であった。また、「都名所図会」安永9年(1780)発行に五条坂付近とみられる焼物商の様子が描かれている。

幕末から明治初期の段階で五条坂には38軒のやきもの屋が立ち並び、^{ほんちようとうきこうしょう}「本朝陶器攷證」は、10の登り窯があったと記されている。明治29年(1896)には市立陶磁器試験場が五条坂に創立された。近代には、五条坂地区に多数の登り窯が築かれ、五条通沿いを中心に窯元や販売店が並び、やきもののまちとして隆盛した。現在五条坂の風物詩ともなっている陶器まつりは、大正8年(1919)に始まったものである。また、五条坂には、陶芸家・河井寛次郎が居を構え、陶芸を行うなど、民藝運動の主要な舞台ともなった。その旧宅である河井寛次郎記念館は、現在、五条坂の名所のひとつとなっている。

その後、五条通りが拡幅され、登り窯は使用されなくなり、陶磁器の生産機能は、清水焼団地(山科区)などに移り、五条坂は陶磁器販売のまちへと変化していった。

現在、五条坂周辺には清水焼の窯元、陶磁器販売店が集まり、登り窯、陶芸家の旧居などが残っていることにより、清水焼の産地としての歴史を偲ばせる。

この中で、昭和40年に開業し京焼・清水焼の販売を行っている楽只苑(市指定歴史的意匠建造物)は、本家初代入江道仙が寛政年間にこの地で陶磁器の製造をはじめ、昭和18年から

有限会社道仙化学製陶所の社長宅兼事務所として使用されていた京町家で、五条通北側に位置する化学陶器の窯元であった。入江家の登り窯は部分的に昔の形を残し、また隣家には現存する登り窯もあることから、この地域の製陶の歴史がうかがえる。主屋と窯の間には、現在でも職人長屋が残っており、主屋のトンネル路地の奥から陶器職人や桐箱職人たちの営みと生活を漂わせている。また、京町家の風情ある歴史的なたたずまいをもつ店内では、京焼特有の繊細な色絵を使った端正な京焼の作品が、訪れた多くの人々を魅了し、やきものの文化的香りを体感させている。



写真2-61 楽只苑



写真2-62 陶点晴かわさき



写真2-63、64 五条坂陶器まつり大器市 提供 五条坂陶器祭運営協議会

他にも、明治末期に建てられたとされている京町家で、四代にわたり清水焼製造・販売を営んできた陶点晴かわさきでは、日用品などの親しみやすいやきものが店内に所狭しと並べられているなど、それぞれの販売店が個性を持ちながら、一体となって町並みを形成している。

毎年8月7日～10日に開催される陶器まつりは、大正初期に精霊迎えに訪れる参詣客を対象に夜店を出したのに始まるとされ、五条通沿いには数百の出店が並び、所狭しと色鮮やかな器が並べられる。登り窯からやきものを焼く煙が漂うような光景は見るのがなくなったが、登り窯が存在したことを偲ばせる坂道において、店の主人が、やきもの店に並んだ器を手取る清水寺の参詣客と会話を交わす姿がそここにあり、今なおやきものまちは健在であり、活気にあふれている。

これらの日常の営みや、陶器まつりの際の営みが、往時を思わせる登り窯などの歴史遺産や五条坂の歴史的な町並みと一体となって、活気ある伝統産業の技術の香りを感じさせている。

(4) 西陣・織物のまち

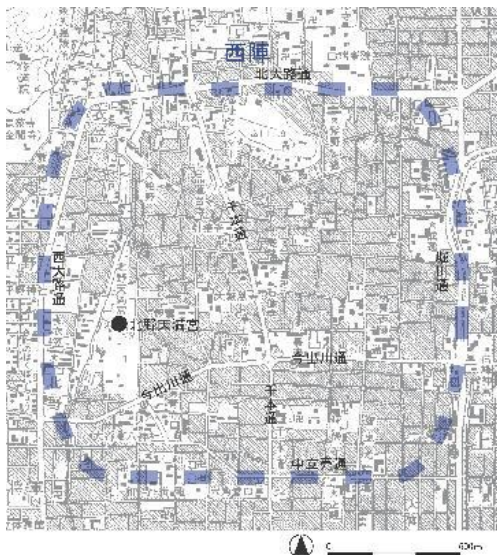


図2-37 西陣

西陣織は、京都を代表する伝統産業である。その生産は多くの工程に分業され、それぞれに高度な専門技能が必要とされる。西陣では、なおこれらの職人が伝統を守りながら、織物の生産を行っている。

西陣とは正式な地名ではなく、西陣織の関係

者が集中する地域の総称といってよい。おおむね、東を堀川通、北を北大路通、西を西大路通、南を中立売通に囲まれた範囲を呼ぶのが通例である。

西陣の地における機業の歴史は、その名の起こりよりはるかに古く、平安時代に律令制の官司のひとつであった織部司の職工たちが機業に従事するためにこの地に住んだことに始まる。平安時代の後期に律令制の諸官庁の崩壊以後も職工たちはそれまでの官機に代わって私機の生産を続け、機業地を形成していった。

室町時代、応仁の乱によってこの地も荒廃した。戦火がおさまると地方に離散していた職工が再び戻り、西軍・山名宗全の陣が置かれた堀川の西あたりを中心に集住した。西陣の名の由来はこれによっている。

江戸時代後期になると、西陣は享保15年



写真2-65 西陣の町並み

(1730)の「西陣焼け」や、天明8年(1788)の「天明の大火」、加えて、桐生、丹後などのいわゆる「田舎絹」の台頭や質素儉約令によって沈滞し、明治を迎えた。

こうした沈滞を打開したのが明治6年(1873)にフランスから輸入されたジャカード機(力織機)による技術革新であった。ジャカード機は明治中頃から普及するマニユファクチュアによって広がり、徐々に中小の織元や自営業者にも広がっていった。現在、最初期のジャカード機は、京都市指定・登録有形文化財として財団法人西陣織物館などに所蔵されている。

西陣地区の町割の特徴としては、通りと通りの間を辻子と呼ばれる路地がつなぐ形態がみられる。平安京の条坊制に由来する京都洛中の

方形街区は、秀吉の都市改造により南北の通りがつくられることで短冊状に変貌し、一方で既に街区内部の開発が進んでいた銚町など下京中心部では、この開発がなされなかったことが知られている。これに対して西陣地区は最初から突き抜けを通す都市改造の対象とならず、以降、辻子と呼ばれる細い路地によって方形街区の内部が開発されていった。

西陣の町家の多くは工住併用住宅である。西陣の工業地域としての特徴は、その主な生産業である機業が高度に分業化されており、その各工程を担当する機業者が集住している点であり、地域が一つの工場を形成しているともいえる。その各工程を結ぶ存在が地場問屋といわれる存在であり、資金を調達して、糸の工面に始まり、各工程の労賃を確保し、最後に製品を室町の間屋に納めていた。織物生産の工程のうち、最も空間形態に大きな影響を与えているのが織りの工程であり、西陣では織りの仕事場を持つ町家の建て方を「織屋建て」と呼んでいる。この西陣における町家は『京町家の暮らし』の項で述べているように、その起源は平安時代中期ごろとされているが、今日見られる京町家が成立したのは江戸時代中期とされている。この地域の特徴である「織屋建て」は、通りニワ形式の平面を基本とするが、奥の間を吹き抜けにして織り場の空間を確保しており、室町辺りの京町家とは大きく異なる。

現在でも試験織りや高級な織物などは、京都で生産を続けている。

例えば、この地域で生産を続けている織元の一つである洛陽織物は、明治31年(1898)の創業以来100年余りの歴史を持ち、その社屋は慶応3年(1867)創建と伝えられる京町家(市指定歴史的意匠建造物)である。現在でも、その奥の工房で手織を織り続けている。

西陣の町を歩くと伝統的な町家からしばしば、「ガッちゃん、ガッちゃん」と機音が聴こえ、色鮮やかな西陣織の図柄が眼前に浮かび上がる。これらの営みが、「織屋建て」の京町家を中心とした歴史的な町並みと一体となって、伝統産業が今もなお息づいていることを感じさせる。



写真2-66 洛陽織物



写真2-67 中での作業の様子

(ウ) 友禅染めのまち



図2-38 友禅

京友禅は西陣織と肩を並べる、京都の中心的な伝統産業である。

かつては、染色産業は良質の水を求めて堀川などを中心に分布していたが、今日では、西陣織ほどには、産地としての集積が見られない。これは、比較的広い敷地を必要とする工程があ

ることなどが理由として考えられる。

ただ、後に示す通り、かつては「水洗い」の工程が堀川等の川で行われていたこと、また室町問屋との取引上の立地条件から、今日でも堀川通り左右の、二条から五条辺りまでの都心部に多数の染加工業者が集中している。

京友禪の歴史は、町人文化の栄えた元禄時代に開花した。当時、京都知恩院門前に住んでいた宮崎友禪斎という扇絵師が描く扇絵が大評判となり、着物の染め模様としても注文されたことに始まるとされている。貞享5年（1688）には、「都今様友禪ひいながた」の雛型本（商品などの縮小図を収録した冊子）が発行されている。江戸時代の友禪染めは、現在の「手描き友禪」とほぼ同じ技法で制作されていたため、生産量に限界があり、限られた地域・人々への供給にとどまっていた。明治時代に入り、文明開化とともに化学染料が染色に導入されるようになると、化学染料による色糊を使用し、型紙によって友禪模様を写し取る写し友禪染めが発明され、「型友禪」として発展を遂げた。これにより、大量生産が可能になったため、友禪きものは一気に普及した。さらにその後、明治期の型染めの広幅への応用やローラ^{なっせん}捺染の導入、戦後の欧米からのオートスクリーン・走行式捺染等の相次ぐ導入が行われるなど、京染技術は多面的な発展を遂げている。

京友禪産地の最大の特徴は、加工方法別・生産タイプ別に、多様な染技法別に生産工程が細分化され、各種の専門業者が存在する社会的分業体制にある。たとえば「手描き友禪」では、プロデューサー機能を担当する染匠の下に精錬業・図案業・浸染業・引染業、下絵業・糊置業・挿し彩色業・蒸し水洗業・絞加工業・金彩業・刺繍業・染色補正業などが存在している。これら十数にもわたる各工程においてそれぞれ専門化され、相互に緊密な分業と協働の関係を構築している。この分業体制が、地域のつながりに影響を与えており、反物はそれぞれの職人の家を次々と移動することで仕上がる。かつて通りには、反物や着物、刷毛や染料などの材料を運ぶ自転車や自動車がひっきりなしに通っていた。現在でも、この界限を歩いていると、平

安時代中期ごろが起源とされ、江戸時代中期に成立したとされている伝統的な京町家に「染」といった文字のある看板を見つけることができる。そして、車や自転車に反物を積んだり、脇に抱えて通り過ぎる人々を、見かけることができる。

京都都心部に位置する本能学区は、良質な地下水を活用し、京染の生産地として発展してきた地域の一つである。現在でも京染に関わる職人が多く住む地域として“染めのまち本能”をキャッチフレーズに、地域の資源である「染め」の文化・技術を現代の魅力として活かしながら、まちづくりを展開している。毎年、春と秋には本能祭りを開催し、多くの染めの関係者の京町家の軒先に伝統色に染めた暖簾を吊るし、型染め、手描き友禪、金箔押し、機械染め、家紋などの様々な工程を見学するコースを設け、地域住民も改めて学区内の染色産業の懐の深さを実感する。日常的にも、自分だけの着物をプロデュースし、自分の好きな反物を好きな色柄に染めて、さらには好みのデザインに縫製し、廉価で提供することにも取り組み、染めの町本能のまちづくりを盛り上げている。



写真2-68 本能での取組の様子

この住民の多くは、小学校の先輩、後輩であり、同業者であり、時代祭の担い手である平安講社のメンバーでもあり、さらには、京町家に住んでいることから、お互いの住まいの状況も良く分かっているため、ことさらコミュニティ活動と気負う必要はない。

「京友禪は水の芸術である」といわれている。友禪染めは、染めが終わったあと蒸して発色・定着させ、その後水洗いを行うが、洗う水の質によって仕上がりが大きく左右されてしまう。

例えば水に鉄分が含まれていると、生地がその鉄分を吸って赤みを帯びてしまうのである。かつて鴨川や堀川で行われていたこの水洗いを「友禅流し」と呼び、古都の風物詩となっていたが、昭和40年代には河川を汚染すると言う理由から、行われなくなった。現在では、屋内の人工川に澄んだ地下水を汲み上げて水洗いを行うところが多く、伝統ある京友禅の美しさを守り続けている。

なお、「友禅流し」を再現しようと、毎年8月に、鴨川の河川敷において洗いを済ませた反物を使ったデモンストレーションが行われ、伝統行事の継承として定着している。

このように、京町家などで行われている京友禅の営みが、京町家を中心とした歴史的な町並みと一体となって伝統の技が今もなお息づいていることを感じさせ、「友禅流し」においては、美しい緑の山々を背景に色鮮やかに彩られた川の風景は、周囲の町並みと一体となって、かつての営みを今に伝え、伝統産業の中心地であると感じさせる。



写真2-68-1 本能学区の事例（金彩荒木）



写真2-68-2 中での作業の様子

(イ) 室町問屋

京都繊維卸の中核をなす室町問屋は、京染産地の卸機能を担うとともに、西陣、丹後も含めた府内繊維卸の総括機能も持ち、また何よりも

和装品の全国最大の集散地として、全国和装品流通の総括機能を持っている。

京都の織物問屋の発祥は、平安遷都時に国家の直営により設けられた市（東市、西市）にまで遡ると言われている。室町問屋街が発生したのは、延宝元年（1673）三井家が店を開き、京織物などの仕入れを行った頃からと見られている。この地が近世的な問屋街へと発展したのは、西陣織と京染の需要が飛躍的に拡大した江戸中期、元禄・享保年間と考えられる。この時代に高級絹織物を中心として各産地から集荷し、諸国に販売する全国市場としての基礎が確立された。江戸時代の京都の名所案内である「京羽二重」からも、室町通沿いに呉服関係の店が集まっていた様子が分かる。

室町問屋は現在でも呉服問屋として知られている。室町問屋とは言うものの、室町通だけでなく、その周辺に渡って分布している。現在でも、平安時代中期ごろが起源とされ、江戸時代中期に成立したとされている伝統的な京町家において問屋業が営まれているところもある。その町並みは、普段は京町家をはじめとする静かな町並みであるが、祇園祭の宵山の時期には、その情景は一転する。「京都の祭礼」でも示したように、室町問屋は祇園祭の山鉦町に立地しており、祇園祭の懸装品の充実には、その歴史を見ることができる。また、室町問屋の中には、「京都の祭礼」でも示した屏風祭りを行う商家もあり、さらに、浴衣をはじめとする和装品を安価で販売する店もあちこちに見られる。山鉦の懸装品や屏風祭り、そして色とりどりの浴衣や帯・小物が並べられている様子は、宵山において室町問屋の繊維問屋街としての歴史を感じさせる。

イ 伝統産業を支える地域に見る歴史的風致

京都には国指定の伝統的工芸品の17品目をはじめとして、伝統的な産業が多数存在する。ここで示した以外にも、先に示した本願寺門前の仏具、後に示す伏見の酒など、範囲は確定しないまでもそれぞれ地域性があり、それぞれに歴史の深さを感じさせる。

また、豆腐などのように京都の良質の地下水に

より、市内各所に広く分布している産業もあり、市全体の中で営みの広がりを見ることができる。

このように、京都では京町家をはじめとする歴史的建造物の中で、今もなお伝統産業の営みが続けられており、これらがその町並みなどと一体となって京都特有の産業の歴史の奥深さを感じさせる。

そして、それらが生産工程において互いに関係し合い、また能などの伝統芸能や茶会などでは、それらの伝統工芸品が道具類や装備品として一つの場に来ることで影響しあい、市内各所でそれぞれの産業が関連し合いながら京都特有の産業を生み出している。これが、京都の伝統産業の最大の特徴である。

(2) 歴史を刻んだ市場・市

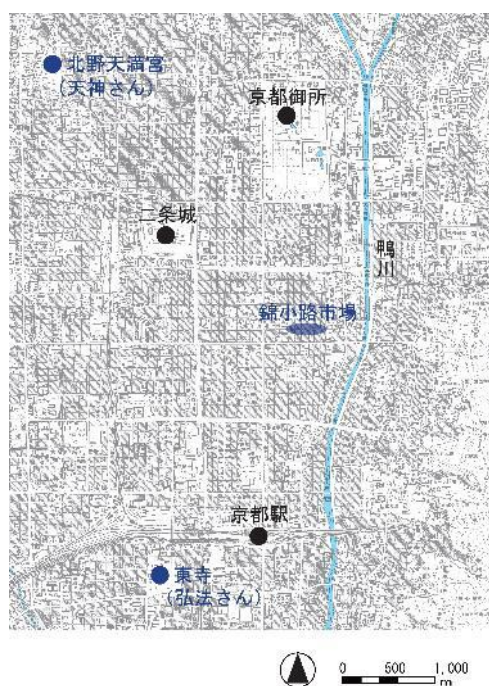


図2-39 歴史を刻んだ市場・市

京都には、古くから栄えてきた市があり、現在においても人々の暮らしに溶け込んでいる。

京都の商店街の中には、錦小路市場のように、近世以前の市場に由来するものが見られる。それが形を変えながらも、現在の都市景観にその歴史を刻んでいる事例として重要な地域といえる。また、決まった日に立つ市として、京都では弘法さんや天神さんが広く知られている。

この項では、上記のような歴史の中で形成されてきた市場や市などに見る歴史的風致を示していく。

ア 具体事例

(7) 錦小路市場

暮れの錦は大変な混雑である。普段は近所で買い物を行う人々も、暮れになると正月の支度のために錦を訪れる。狭い道に多くの買い物客が訪れるため、かいくぐるように歩かなければならない。店のご主人や店員の大きな掛け声と、雑踏のざわめきが、市場の雰囲気を一層盛り上げる。

錦小路通は平安京が造営された際から存在する通りで、建設当初、道幅は12メートルあったが、その後、時代を経るにしたがって幅員が狭くなっていった。

魚鳥の市場として開設された年月は明らかではないが、この地が人口の密集した中枢部にあたることと、清冷な地下水が湧き出るので魚鳥の貯蔵等に便利であり、御所への魚鳥の納入の経路であったため、自然にこの地に市場が発生したと言われる。

本格的な魚市場となったのは、江戸時代初頭の元和年間(1615～1623)、幕府より魚問屋の称号が許されたことが契機となった。17世紀半ばには、上の店、錦の店、六条の店(問屋町)の三ヶ所が最も繁栄を極め、これを三店魚問屋と称した。特に錦に店をもつ商人は、公儀から鑑札を得ることにより独占的な営業をしたという。明和7年(1770)に錦小路高倉に青物市場が奉行所より認められ、その後魚問屋付近に野菜の市場が開かれた。

現在の錦市場商店街は、通りが約3mと狭く、店も多くが「うなぎの寝床」と称される間口が狭く奥行きが深い形態となっており、京町家として現存しているところも多い。敷地割や建築構成は、近世以前の形態が残存し、町並みのスケール感を残している。また、商品を通りにはみ出して並べ、店により扱う商品の重複を避けたり陳列に気を使うなど、店と通りの空間を一体としていて、錦市場商店街として大きな一つの空間としてのイメージを与えている。同時に、各店の個性が強く印象づけられる。このように、歴史的な町並みの構成を残すとともに、商業形態は変化しながらも、市場を継承した小売業が継続されている。

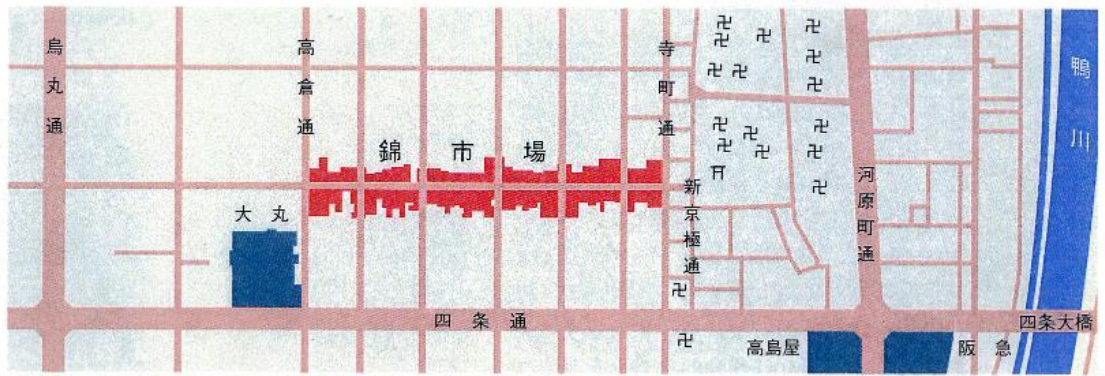


図2-40-1 錦市場の位置 出典 「京都歴史アトラス」1994年, 足利健亮 編, 中央公論新社

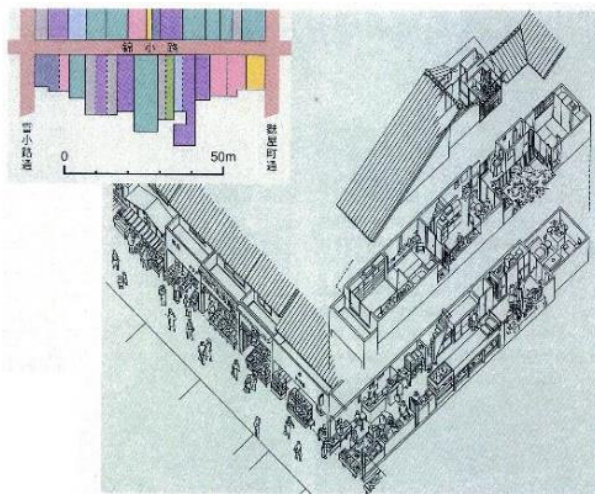


図2-40-2 錦の町並と町家 出典 「京都歴史アトラス」1994年, 足利健亮 編, 中央公論新社

錦市場のアーケードの中に、店の間をめいっばいに開いた京町家の店舗が連なり、そこには京野菜や魚、漬物といった商品が所狭しと並べられており、他の店に負けじと発する呼び込みの声やざわめきと市場特有のにおいが相まって、行き交う買い物客に古くから続く、活気あふれる京都の台所の風情を感じさせている。



写真 2-69 錦小路市場

(イ) 縁日市

縁日というのは「有縁の日」「結縁の日」の意味で、神仏の降誕・示現・誓願などにちなんで、霊験が顕著とされる日である。寺社ではこぞってこの日を宣伝し、大衆の参詣を促していた。寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった江戸時代の京都では、縁日には、その寺社の境内・参道あるいは周辺付近に、必ず露店の「縁日市」が立った。この縁日のうち、京都市には、弘法さん・天神さんといった、広く市民に親しまれ、多くの参拝者で賑わう、毎月の縁日市がある。

a 弘法さん

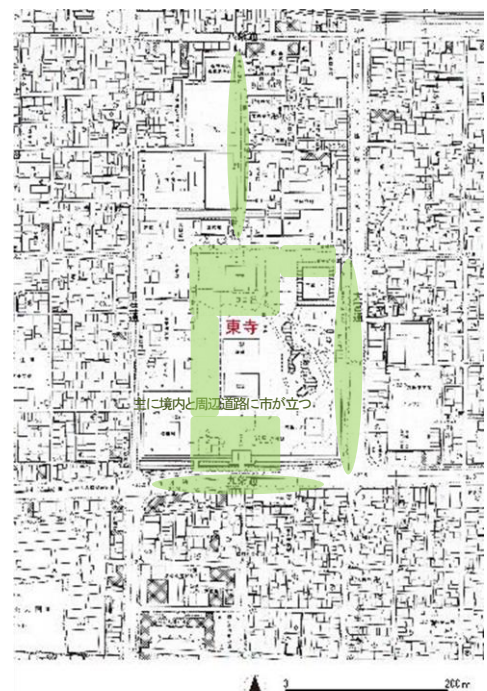


図2-41 弘法さん

「弘法さん」は、弘法大師空海の月命日の21日に、東寺（教王護国寺）で行われる弘法市である。弘法市の起源は明らかではないが、中世に「一服一銭」で茶を商う商人が出るようになり、江戸時代には植木屋などその他の商人も出るようになったことが始まりであるとも言われている。寛政11年（1799）に発行された「都林泉名勝図会」^{みやこりんせんみょうしょうずえ}には、空海の命日に行われる法要、御影供^{みえく}の時の参道の様子が描かれており、植木屋や食べ物^{みえく}の屋台の様子などが見受けられる。

この市が開かれる東寺は、東寺真言宗の総本山である。延暦13年（794）の平安遷都に際して、仏教勢力の排除を意図し、平安京には国家鎮護のため羅城門の東西に、東寺、西寺の二つの官寺のみが造営された。以降、西寺が衰退していったのに対して、東寺は勢力を維持しつづけた。嵯峨天皇により空海^{かし}（弘法大師）に下賜され密教寺院となった東寺は、鎮護国家・王城守護の寺院にとどまらず、密教の隆盛によって貴族の信仰を集めた。空海没後、弘法大師信仰が盛んになり、庶民の信仰によって栄えていく。このため、鎌倉時代以降、大宮七条に稲荷社御旅所があったことなども影響し、次第に東寺門前には、門前町が形成された。



写真2-70 弘法さん

「弘法さん」の当日、の東寺では、御影供^{みえく}が営まれるが、境内や寺の周りには多くの縁起物、日用雑貨品から植木、骨董品まで、広い境内や周辺の通りに所狭しとあらゆる商品の露店が多数軒を並べ、参詣客と活気あるやりとりが繰り広げられる。

なかでも、1月の初弘法^{はつこうぼう}と12月の終い弘^{しま}

法は特に多数の参詣客で賑わい、威勢のよい商人の呼び声が、雑踏の中に響き渡る。

築地塀越しに見える堂舎や五重塔の風景を背景に繰り広げられ、縁日の活気とざわめきの中、買い物客等は時を越えて歴史ある風情を感じさせる。

b 天神さん



図2-42 天神さん

天神さんは、平安時代に学者・政治家として活躍した菅原道真をお祀りする北野天満宮（国宝）において、毎月25日、菅原道真公の月命日に行われる市である。初天神の北野詣では近世の記録にもあり、「弘法さん」と同様、寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった近世には、人々の生活の身近な月市として親しまれていたと考えられる。

「北野の天神さん」と親しまれている北野天満宮は、天暦元年（947）に創建され、中世以降、次第に文教の祖神とも仰がれるようになり、特に学問の神様としての信仰が篤く、受験シーズンには市内だけでなく遠方からも御利益を求める人で賑わう。

縁日が開かれる当日は弘法さんの縁日と同様、参道や御前通^{おんまえどおり}近辺には多くの露店が立ち並び、終日活気にあふれており、今出川通りからもその活気を感じられる。天神さんは骨董品と古着の露店が多く集まることで有名であり、なかでも、1月の初天神と12月の終い天神は特に多数の参詣客で賑わいをみせる。

弘法さん、天神さんの両縁日が張り合うことから、「弘法さんの日が雨なら天神さんの日は晴れる」などといわれている。

立ち並ぶ多くの露天の活気が、北野天満宮といった歴史的に価値の高い建造物を中心とする周辺の北野界わいの歴史的な町家群等の町並みに溢れ出している。



写真2-71 天神さん

イ 歴史を刻んだ市場・市に見る歴史的風致

このように、京都の長い歴史の中で形成されてきた市場や市は、今もなお活気を保ち続けており、客と店員が声を張り上げながら会話する姿や、独特の香りは、今も昔も変わらない市の歴史と力強さを感じる。そして、その活気ある様子が周辺からも見て取れ、人々の心を浮き立たせ、さらに人々を市の中へと誘い込む。また、これらの歴史ある市場や市では、扱われているものも伝統や歴史を感じさせるものが多く、一層風情を引き立てている。

これらの市場・市の営みは、中心となっている寺社や歴史的な町並みとともに、訪れる人々に、歴史とともに積み重ねられてきた市場や市の歴史を感じさせてくれる。

(3) もてなしのまち・花街^{かがい}

京都には、上七軒、祇園甲部、祇園東、宮川町、先斗町^{ほんちよう}の五つの花街がある。ここでは、京都独自の洗練されたもてなしの文化が受け継がれ、息づいている。芸妓や舞妓の立ち居振る舞い、洗練された和装姿、それらは全てもてなしの文化が形となって現れたものである。

この項では、まず京都の花街の概要を説明したのち、花街の「をどり」などを題材に、もてなしのまち花街の歴史的風致を示していく。

ア 京都の花街



図2-43 京都の五花街

京都の花街の多くは、近世初頭頃から、北野社や祇園社、清水寺といった地域の神社仏閣へ参詣する人々に茶をもてなす水茶屋が起源となっており、発祥したものである。現在は五花街となっているが、平成8年までは島原にもお茶屋組合や歌舞練場があった。

花街には、芸妓や舞妓が生活する置屋^{おきや}（京都では屋形と呼ばれる。）と、座敷で客人に舞や音曲を披露し、酒席の空間を提供する「お茶屋」があり、屋形がお茶屋を兼ねているところもある。芸妓や舞妓は、屋形で生活し、芸事等の稽古は、各花街の学校や検番などで行なっている。

このような学校は、芸妓や舞妓が花街の外で働こうとした際に困らないよう手に職をつけるた

め、裁縫、機織り等を教える目的で、明治時代初期に設立されたのが前身である。当時は、芸妓や舞妓だけでなく、その花街に暮らす女性一般の教育も広く担っていた。現在、祇園甲部では「八坂女紅場学園」、先斗町は「鴨川学園」、宮川町は「東山女子学園」があり、舞踊、邦楽、華道、茶道等を教えている。上七軒には、これに相当するものがなく「検番」に拠っている。また、祇園東には「美暦女紅場」があったが大正年間に無くなり、現在はお茶屋組合で稽古を行なうことで、花街の伝統を継承している。

イ 具体事例

(7) 上七軒



図2-44 上七軒

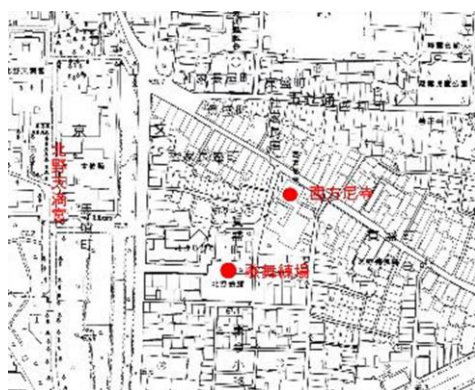


図2-45 上七軒 (拡大図)

五つの花街の中で最も古い花街が「上七軒」で、15世紀中頃北野天満宮（本殿は国宝）が一部焼失し、修理工事の際に残った材料の払い下げにより出来上がった7軒の茶屋が起源になる。

今も趣のある町並みを残す上七軒の花街を中心に、「上京北野界わい景観整備地区」に指

定している地域は、北野天満宮の門前としての特色ある風情を今に留めている。特に、上七軒通りには、茶屋が建ち並び、門前町の賑わいとともに花街の伝統文化が継承されており、優雅で落ち着きのある町並みを形成している。

また、このあたりは、天正15年(1587)豊臣秀吉が催した北野大茶会の会場であり、上七軒歌舞練場の北にある西方尼寺の中には、茶会の折に千利休が使ったと伝承されている「利休の井」があり、今もこの寺では釜が掛けられ、茶道の愛好家が訪れている。さらに、梅の名所で知られる北野天満宮で行われる春の「梅花祭」の際には、上七軒の芸妓・舞妓などの奉仕により、野点が開催される。境内の梅と併せた華やかな催しが行われ、北野天満宮の門前町としての歴史的な活動が、今に引き継がれている。

上七軒の歌舞練場は、明治28年(1895)に建設されたもので、その後増改築を重ね、昭和26年に現在の形になった。昭和27年(1952)に上七軒歌舞練場で始められた「北野をどり」は、北野天満宮千五十年大万燈会を記念して開催されたもので、踊りの振り付けは花柳流で、毎年春には多くの客で賑わいを見せている。この時期になると、お茶屋の前には「北野をどり」のちょうちんが点され、雅な京都らしい独特の風情を醸し出している。

(4) 祇園甲部

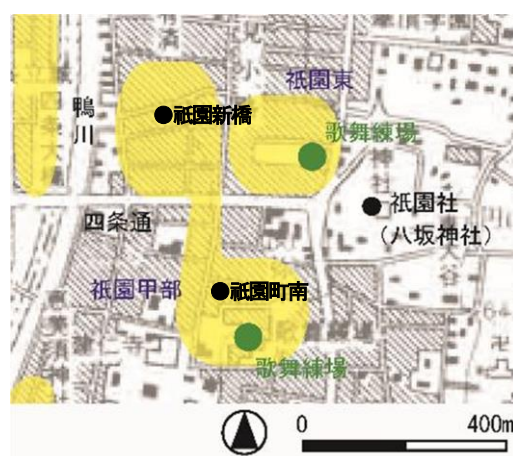


図2-47 祇園甲部, 祇園東

現在、最も大きな規模を誇る花街が「祇園甲部」である。寛文10年(1670)に鴨川の改修工事が進み、大和大路(縄手通)に「祇園

そとろくちよう
外六町」が開かれ、お茶屋の営業が許された。
さらに正徳2年(1712)には「祇園内六町」
が開かれ、祇園の市街地は拡大の一途をたどっ
ていった。19世紀初頭には、祇園町のお茶屋
は700軒、芸妓・舞妓併せて3,000名を
超えたと言われている。祇園町は明治14年に
甲部と乙部に区分され、その甲部が現在祇園甲
部と呼ばれるところである。

明治新政府が行った「^{はいぶつきしゃく}廃仏毀釈」※政策による上知令により、寺社領が縮小することで京都の町並みは大きく変化し、祇園町にも大きな影響を及ぼした。明治5年(1872)建仁寺の境内の北部が上知され、現在の祇園町南側に編入されたことから、町家が立ち並ぶ花見小路などの町通りが形成された。地域に編入された多くの土地は、女紅場学園の所有となり、お茶屋は土地を借りることになった。現在もお茶屋形式の建物が建ち並ぶ町並みが守られてきた理由の一つとなっている。

「祇園甲部」のうち、「祇園新橋伝統的建造物群保存地区」に指定している祇園新橋や「祇園町南歴史的景観保全修景地区」に指定している付近は、今も良好なお茶屋形式の町並みが残っている地区であり、千本格子にすだれをたらし茶屋町の町並みを背景に、日中お稽古に向かったり、夕暮れ時にお座敷に向かう芸妓や舞妓を見かけることができる。また、夜になると、格子からもれ出る明かりと通りの街灯の影が織り成す風景がお茶屋の風情を今も醸し出している。

この地域で毎年春に行われる「都をどり」は、明治4年(1871)の東京遷都により繁栄に陰りがさした京都を立て直すため、京都府が岡崎地域に於いて京都博覧会を開催し、翌年、博覧会の余興として行なったのが始まりである。このとき振り付けを依頼されたのが片山春子(三世井上八千代)師で、第1回は祇園新橋のお茶屋「松の屋」で開催された。以後、祇園の舞は「井上流」一筋となり、今も井上八千代宅での舞の公演会には、多くの舞踊愛好家が訪れ、親しまれている。

「都をどり」は、明治6年(1873)建仁寺塔頭清住院を改造した歌舞練場で第2回目



写真2-72 上七軒の町並み

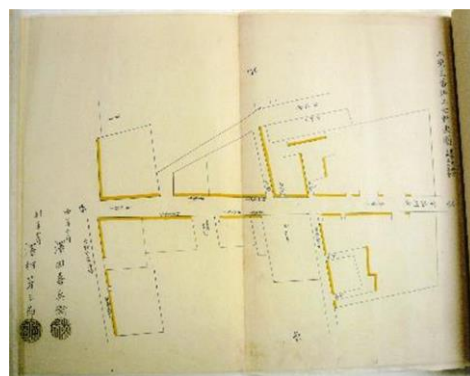


図2-46 上七軒 京都府下遊郭由緒(明治初期)

京都府立総合資料館 所蔵



写真2-73 祇園甲部歌舞練場(国登録有形文化財)

提供：祇園甲部組合



写真2-74 都をどりの時期の茶屋

提供：祇園甲部組合

が行われたが、大正2年（1913）に現在の歌舞練場（祇園甲部歌舞練場本館他：国登録有形文化財）で開催され、以降、毎年4月の風物詩となっている。この地域では、「都をどり」の時期になると、お茶屋の軒先には「都をどり」のちょうちんが吊るされ、京都の人々に春の到来を感じさせる風景を作り出している。

※ 神仏分離令を発端とする明治初期の廃仏の運動

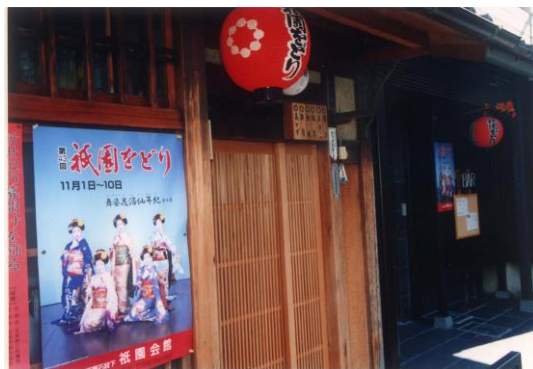


写真2-75 祇園をどりの時期の茶屋



写真2-76 京おどりの時期の茶屋

(ウ) 祇園東

「祇園東」の辺りは、禁裏守護の火消し役であった江洲膳所藩の京屋敷があった場所であり、「膳所裏^{ぜ ぜうら}」とも呼ばれていた地域である。明治3年（1870）にこれらの屋敷が撤去された跡にお茶屋が建ち、当時栄えていた祇園町の花街が広がった。明治14年（1888）に京都府知事により祇園町は甲部と乙部に区別され、乙部は昭和24年（1949）に「東新地」と改称され、昭和30年（1955）頃に「祇園東」となった。

「祇園東」では昭和27年（1952）より「祇園をどり」が始められた。踊りの振り付け

は藤間流で、昭和33年に建てられた「祇園会館」で、他の花街では春に開催される中、ここでは毎年秋に開催されている。この時期になると、八坂神社の西楼門のはす向かいに位置する祇園会館はちょうちんやぼんぼりで飾られ、また茶屋の前には、祇園をどりのちょうちんが灯される。

(エ) 宮川町



図2-48 宮川町

「宮川町」は、出雲の阿国につながる歌舞伎にゆかりのある花街である。

寛文10年（1670）に行われた鴨川の護岸工事により急速に町並みが整い、歌舞伎の若衆の役者たちが酒席に呼ばれる茶屋が多く生まれたことが宮川町の起源となっている。茶屋の許可が宮川町全体に下りたのは、宝暦元年（1751）にまで下る。

宮川町で行われている「京おどり」は、昭和25年（1950）に宮川町歌舞練場で開催されたのが始まりで、途中南座で開催されることもあったが、昭和44年（1969）にこの歌舞練場が建替えられて以降、毎年春に同地で開催されている。踊りの振り付けは、元は上方舞^{うめ もとりゅう}の榎茂都流であったが、30年程前から明治期に花柳流から独立した若柳流となった。開催が4月になることから、歌舞練場界隈の疎水端は桜の満開の景色となり、ぼんぼりもしつらえられる。



写真2-77 京おどりの時期のぼんぼり

ぼんとちょう
(オ) 先斗町

「先斗町」は、宮川町と同じく、寛文10年（1670）、鴨川と高瀬川間の護岸工事により生まれた中の島に、延宝2年（1674）に若松町に5軒家が形成されたことを契機に、

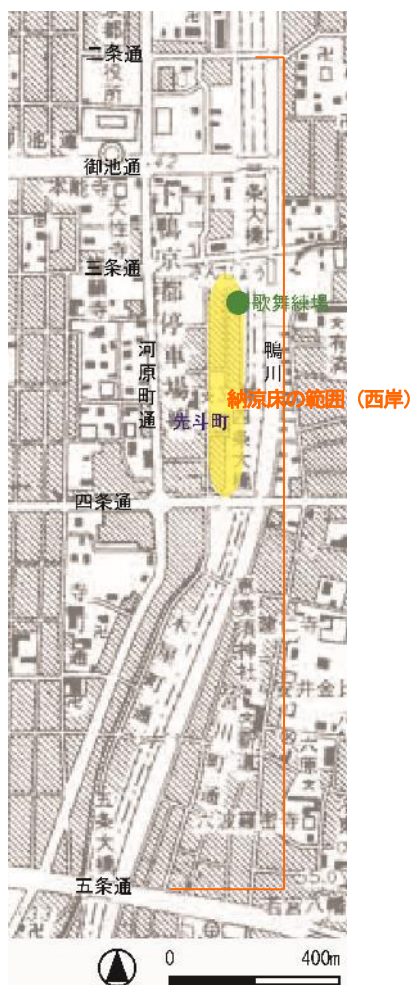


図2-49 先斗町

急速に家が建ち並び、町並みが整っていったことが起源になる。正式に芸妓取扱いの許可が下りたのは、文化10年（1813）になってからで、町の名前となっている先斗の由来は諸説

あるが、ポルトガル語のポント（先、先端、点）に由来するとも言われている。

先斗町の「鴨川をどり」も、祇園甲部の「都をどり」と同様に明治5年（1872）の京都博覧会の余興として開催されたのが起源で、当初は裏寺町四条上る大竜寺横の「千代の家」で開催された。踊りの振り付けは尾上流で、現在は昭和2年（1927）に完成した先斗町歌舞練場で毎年春に開催され、「都をどり」と同じくまちが賑わいを見せる。

また、先斗町は鴨川の納涼床が行われる場所としても知られ、現在では毎年5月1日から9月30日の間、先斗町を含めた二条大橋から五条大橋までの鴨川の西岸に、納涼の床組みが建てられる。鴨川の納涼床の歴史は古く、江戸時代に裕福な商人が夏に遠来の客をもてなすのに、四条河原付近の浅瀬や中洲に床几を置いたのが起源といわれている。安永9年（1780）に発行された「都名所図会」には、四条河原の床几などでの納涼の様子が描かれている。当初



写真2-78 先斗町の町並み



写真2-79 鴨川をどりの時期の先斗町

提供：先斗町お茶屋営業組合

は床几形式であった床は、数百年に亘る歴史の中で幾多の変遷を経て、現在見られる高床式の姿となり、納涼床では川面を流れる涼風を感じ、せせらぎの水音を聞き、暑い京の夏に涼感を与えてくれる。まさに、人々の暮らしの知恵でもある。

風情のある建物から鴨川に面して床が連なり、その上に舞妓や芸妓の花を時折見つけることができる頃になると、京都の夏を感じる季節になる。



写真2-80 鴨川の納涼床

ウ もてなしのまち花街に見る歴史的風致

花街では、具体事例に示したようなハレの舞台である「各花街のをどり」や、日常の暮らしが時代を超えて受け継がれ、おもてなしの文化として今もなお花街の歴史的町並みに生き生きと息づいている。

芸妓や舞妓たちにとって、日頃鍛錬している芸の発表の場である「各花街のをどり」の日には、具体事例に示したとおり、花街の街なみは提灯やぼんぼりで彩られ、華やかな装いとなる。夕暮れともなれば、提灯やぼんぼりに灯りがともされ、時にはそれが川面に映し出され、昼間とは違った風情を醸し出す。

日常の営みにおいても、普段着姿の芸妓や舞妓がお稽古や髪結いさんに向かう姿や着飾った芸妓や舞妓がお座敷に向かうあでやかな姿などを、花街の町並みの中で見ることもあり、花街の独特の風情が漂う。

また、花街の日常は様々な業種の人々に支えられている。例えば、お茶屋が酒席に出す料理は、近くの仕出し屋から取り寄せるシステムとなっており、仕出し屋の配達時刻になると料理を届ける

仕出し屋さんの姿が各所で見られる。他にも、着付けを担当する男衆さんと呼ばれる人々が、芸妓や舞妓の着付に向かう姿などが見られ、町全体で花街の文化を支えている感じが感じられる。

そして、花街の活動は、花街内部だけにとどまらず、祇園祭の花傘巡行への参加や、時代祭の行列参加など、京都の代表的な年中行事における重要な役割をも担っており、京都の町衆としての営みを見ることができる。

落ち着いた町並みによって引き立てられる芸妓や舞妓や町の人々の姿、時おり耳にするはんなりとした京ことばの会話、これらは全て、人々をもてなす花街の文化を感じさせる。



写真2-81 花街での暮らし 1



写真2-82 花街での暮らし 2

—文化・芸術のまち京都—

(1) 文化・芸術のまち京都

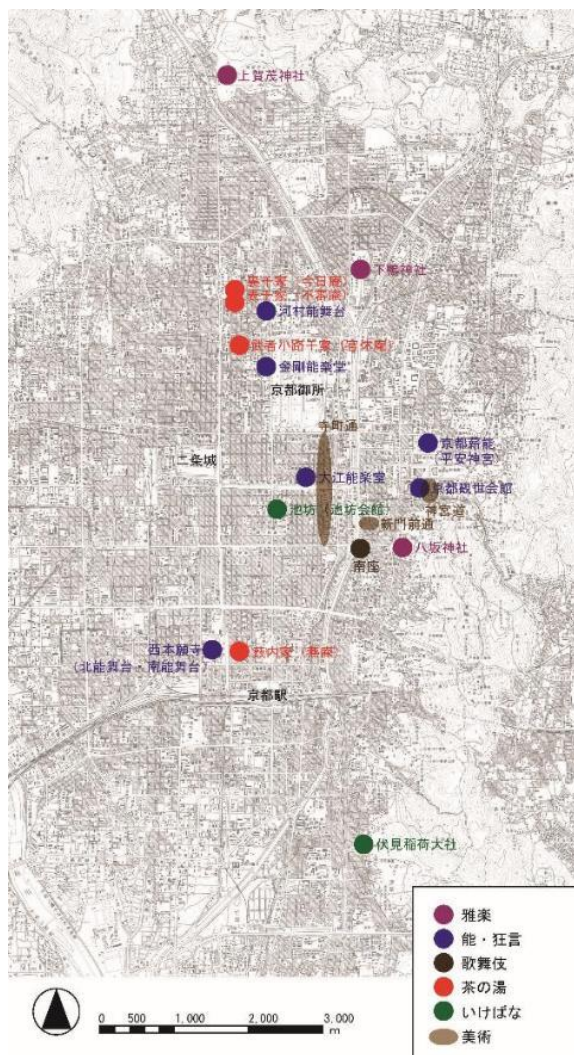


図2-50 文化・芸術のまち京都（具体事例箇所）

京都は、平安遷都以来およそ1100年の間、わが国の都であり、それを支えてきた公家の文化が綿々と伝えられてきた。その公家文化は、室町期以降の武家文化とも融合し、京都は洗練された日本文化の中心地としてあり続けた。近世に入ると、それまでの文化に町人文化が加わった。この時代には、政治的中心は江戸に移ったが、文化的中心は依然として京都にあった。そして、これらのことを背景とした京都は今もなお、文化・芸術が広く市民生活の中に浸透し、日常的な暮らしの中に息づいている。

この項では、現在京都で行われている能・狂言などの伝統芸能、茶の湯やいけばななどの市民の間で親しまれている伝統文化、伝統に培われてきた美術などを例として、文化・芸術の地である京都の歴史的風致を示していく。

ア 具体事例

(7) 雅楽



図2-51 東遊（八坂神社）

「雅楽」は、平安遷都以前に生まれた歌と舞、管・絃・打楽器が一体となって繰り広げられる総合芸術で、雅な雰囲気^{がくそ}に包まれた日本の伝統芸能である。10世紀に宮中のほか南都や天王寺に雅楽を司る楽人の組織である「楽所」が成立し、中世末期から近世初頭にかけて、京方（宮中・京都）、南都方（興福寺・奈良）、天王寺方（四天王寺・大阪）の「三方楽所」と呼ばれる雅楽の伝承組織が整えられた。

明治6年（1873）に雅楽に関する制限が解かれ、現在のように誰もが雅楽を演奏することができるになると、京都でも雅楽を演奏する「雅楽会」が結成され、それ以降、京都の多くの寺社を始め全国の有名寺社で演奏が行われるようになった。

現在、各神社の祭礼や初詣などで雅楽は不可欠な存在となっており、人々が雅楽に触れる機会も多い。

『京都の祭礼』の項で示した盛夏に行われる祇園祭で広く知られている八坂神社において奉奏される「東遊」^{あずまあそび}でも雅楽が演奏されている。この「東遊」は天延3年（975）に、疱瘡^{ほうそう}の災を除くため、朝廷より奉幣したことが始まりと言われ、毎年6月に行われている。また、賀茂別雷^{かもしわけいかづち}神社（通称、上賀茂神社）や賀茂御祖

神社（通称、下鴨神社）の社頭の儀においても雅楽は演奏され、時間がゆったりと流れるような舞や音色は、人々を厳かで雅やかな王朝の世界に誘っている。

このような営みが、舞台となっている寺社等の歴史的な建造物と一体となって、境内やその周辺において展開され、平安時代から綿々と続く宮廷の雅さに、京都の伝統文化を感じさせる。



写真2-83 東遊（八坂神社）

(4) 能・狂言

室町時代に開花した京都の文化を代表する「能」は、江戸時代まで「猿楽」と呼ばれており、平安時代に宮廷で演じられていた唐に由来する「散楽」と平安中期に生まれた「田楽」が「猿楽」に大きく影響を及ぼし、室町時代に今日の能楽の基礎を成した。

「能」は、観世流、宝生流、金春流、金剛流、喜多流の五流派があり、各家元は江戸時代に江戸に移ったが、現在京都には一時衰退しその後には再興した金剛流の家元がある。金剛能楽堂は、明治初年金剛家の祖野村三次郎直寛が石清水八幡宮の能舞台を買い取り自宅に移築したものであり、元は室町にあったが平成15年に現在の地（烏丸今出川下る龍前町）に新たな「金剛能楽堂」が開館し、その際、130年近い歴史を持つ能舞台がそのまま移築された。ここでは、数々の能などの公演が行われている。

一方、江戸時代の京都では、能の歌詞である謡曲を歌う「謡」が一般の人々に流行していたことから、後に「京観世五軒家」と呼ばれる家々が観世流の素謡を広めるとともに、「京観世」という固有の文化を形作った。観世屋敷の

管理や運営を任された片山家は、現在も京都における流派の中心的存在であり、能楽は観世会館を中心に定期的に開催されている。また、その他の観世流の能楽堂としては、明治時代後期に建てられた京都最古の能楽堂「大江能楽堂」や「河村能舞台」などがあり、ここでも定期的に公演が行われている。

能と同様に猿楽から発展した「狂言」は、明治期以降は、能、式三番と併せて「能楽」と呼び、能の一部として演じられる「間狂言」のほか、いわゆる独立して演じられる「狂言」がある。近代以降、京都では「お豆腐主義」を公言する茂山千五郎家が庶民的な狂言を演じて、好評を得た。江戸家元の場合は武家式楽の伝統を今に残す古風で剛直な芸風に対し、茂山千五郎家は写實的で親しみやすい芸風である。



写真2-85 京都新能

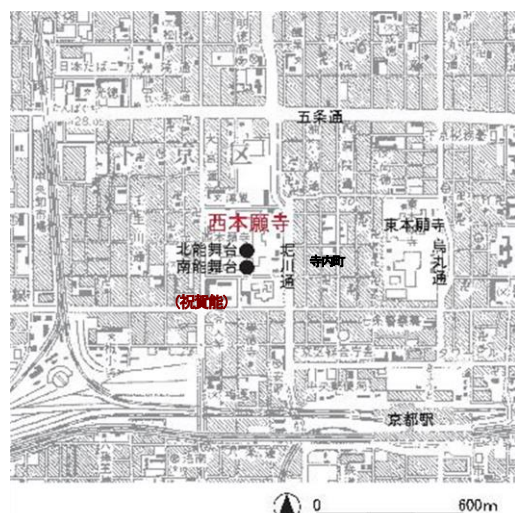


図2-52 宗祖降誕会 祝賀能（西本願寺）

能・狂言が行われる能舞台は、もともと舞台部分には屋根がかかっているが観客席は露天

となっており、現在のように能舞台と観客席とが一屋根の下に収まった「能楽堂」になったのは明治14年に建設されたものが最初である。

西本願寺には、天正9年(1581)の墨書があり、現存最古といわれる能舞台「北能舞台(国宝)」や「南能舞台(重文)」があり、毎年5月の親鸞の誕生を祝って催される行事、「宗祖ごうたんえ降誕会」では、この南能舞台で祝賀が演じられ、多くの参拝者に披露されている。

他にも京都の寺社等には能舞台を持つところが多くあり、今なお能や狂言が演じられる舞台として、活躍している。

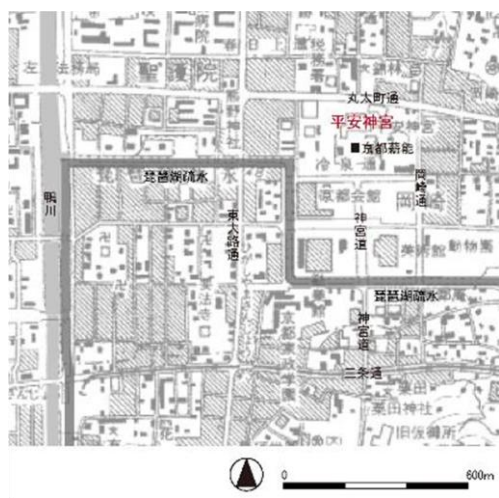


図2-53 京都薪能(平安神宮)



写真2-84 市民狂言会(第214回市民狂言会より)

また、京都薪能は、毎年6月の夜、平安神宮で行われており、平成21年度で60回を数える初夏の風物詩となっている。夕方から能を始め、日が暮れるとかがり火を焚き、屋外での奉納の風情を醸し出している。平安神宮を舞台に幽玄の世界が繰り広げられる。

能や狂言、謡の舞台は、能楽堂などの歴史的

な建造物だけではない。京都の旧市街地に残る京町家の前を通ると、謡の声や鼓の音が聞こえる。また、能の稽古のために京町家の2階座敷を板張りにしている所もある。

このように、歴史的な能舞台などで演じられる能・狂言は、寺社等の歴史的建造物や、町の各所から聞こえる謡に親しむ市民の声、周囲の歴史的町並みと一体となり、人々の趣味の奥深さと情緒を感じさせる。

(f) 歌舞伎

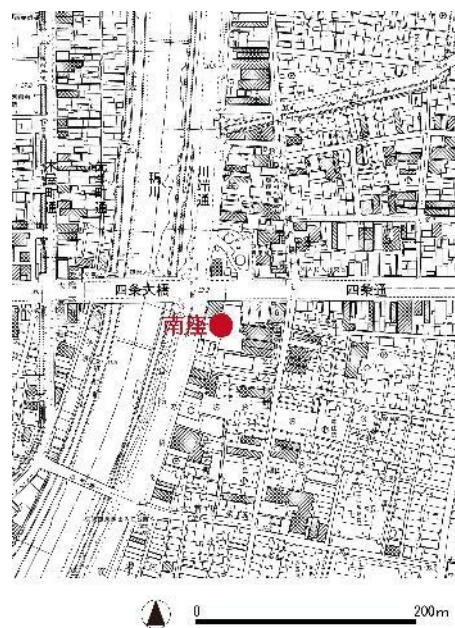


図2-54 吉例顔見世興行(南座)

師走に入り、京都南座に顔見世のまねき看板が上ると、京都では日々のご近所同士の挨拶の中に、「顔見世」の言葉が上ようになる。その彩りに、早くも正月気分がただよい、あわただしさも忘れてしまう。吉例顔見世興行は、古くから京都の師走を彩る風物詩であり、寛政11年(1799)に発行された「都林泉みやこりんせん名勝図会」には既にその様子が描かれている。みょうしょうずえ

歌舞伎は、今から400年前、出雲阿国が北野天満宮の境内で「かぶき踊り」を踊ったのが始まりであると言われている。

南座は元和年間に京都所司代が公許した七つの芝居小屋の一つであったが、明治の時代まで存続したのは、南座・北座の二つのみであった。このうち北座は明治26年に廃絶し、南座

のみがその位置もそのままに残された。建築物としては何度も建替えられているが、江戸時代初期からこの場所にあり、歴史ある劇場と言える。現在の建物（国登録有形文化財）は昭和4年に建てられたもので、平成3年に外観はそのままに内装を全面改修している。

顔見世のまねき看板には、その年の顔見世に出演する歌舞伎役者の名が一枚ずつ筆太の字で丸く大きく黒々と書かれている。歌舞伎独特の勘亭流^{かんていりゅう}という書体で、観客を招くための宣伝看板でもある。毎年11月下旬には南座の正面に、檜の一枚板の看板が2段にわたって掲げられる。

興行がはじまると、南座の前には待ちにまつた人々で賑わい、吉例顔見世興行^{きちれいかおみせこうぎょう}のために着物^{あつら}を誂^{あつら}える人もいる。

南座の建物とまねき看板、そして鑑賞に訪れる人々の姿が、師走のあわただしさを吹き飛ばすような、心浮き立つ京都ならではの華やきを醸し出し、伝統的な風情を感じさせる。



写真2-86 南座 まねき看板（平成19年の顔見世より）

(I) 茶の湯

茶の湯は、慈照寺の東求堂^{じしょうじ とうぐどう}（国宝）内の四畳半の同仁齋^{じゅこう}において、村田珠光^{むらた じゅこう}等が、禅門の儀式である茶礼から分離させた新しい茶礼に始まるとされる。その後、武野紹鷗^{たけの しょうゑ}※1に伝えられ、さらに門下の千利休において大成され、戦国武将の中で広がっていった。

利休没後、千家は利休の子の少庵により復興され、孫の宗旦の三人の子が、「表千家」、「裏千家」、「武者小路千家」を興し、三千家の基礎ができあがった。

江戸時代の元禄期になると、茶の湯は町人社会に広がり、三千家や藪内家の他、現在も伝統を守り続けている久田家、堀内家、速水家の茶家により多くの町人に普及した。

近代に入り、一般教養として茶の湯が取り入れられるようになり、人々の日々の暮らしの中で、親しまれるようになった。

現在、千利休や茶の湯と関係の深い大徳寺では、毎月利休の命日である27日に、塔頭「聚光院」において三千家が交代で、重要文化財の方丈や茶室の閑隠席^{かんいんせき}などで法要や茶会が、またその他の塔頭でも茶会が行なわれる。

他にも、京都の神社仏閣では各家元の献茶奉仕が行われるほか、これらの寺社に付属する茶室等では「月釜」と呼ばれる会員制の茶会が普及し、御香宮神社、北野天満宮、梨木神社、大徳寺、など現在20箇所以上の寺社で月釜が行なわれている。新年の頃になると、和装姿で「初釜」に向かう人々が往来し、町並みに彩を添えている。また、御香宮神社や梨木神社は、名水があることで知られており、人々がお茶を点てる水などを汲みに訪れる姿が見られる。

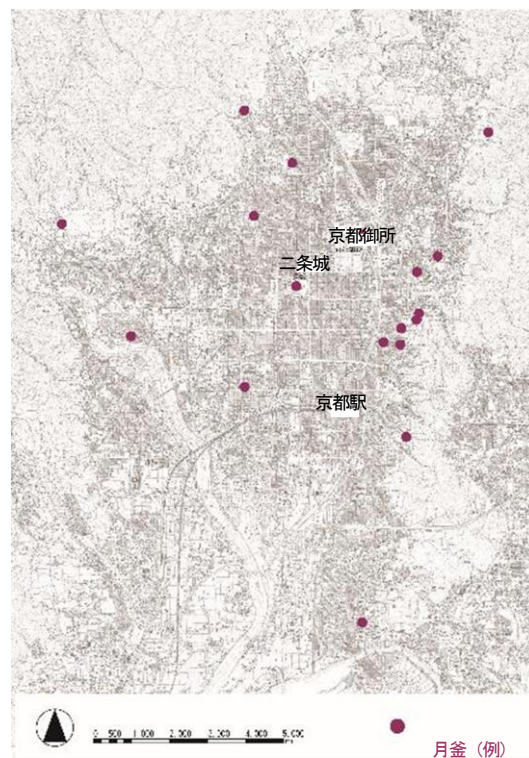


図2-55 京都の月釜（例）

茶道の家元である表千家（不審菴^{ふしんあん}）や裏千家（今日庵^{こんにちあん}）、武者小路千家（官休庵^{かんきゅうあん}）の建ち並ぶ小川通の周辺は、全国から修業のために来訪した和装の人々が行きかい、華やかな雰囲気をかもし出している。また、風情ある茶道家の表構えは、日本的な美の世界である茶の湯のもてなしの心を自然に感じさせる。この小川通りはかつて小川^{こかわ}が流れていたところで、表千家、裏千家、武者小路千家の三千家が小川通りに面しているのは、良質の地下水がわくためであったと言われる。ここでは、茶の湯を手掛ける人々の日常の姿があり、行きかう和装姿の人々や、茶道具店に並べられた道具類もまた、町並みに風情を与えている。三千家とは場所が離れるが、藪内家（燕庵^{えんなん}）は、世界遺産に登録されている西本願寺の東に位置し、その構えは本願寺界わいの風情を醸し出す一つの重要な要素となっている。

このように、京都の歴史的な寺社等において行われる茶会等の営みとそこに集う和服姿の人々の営みが、寺社等の歴史的建造物やその周辺の町並みと一体となって、静寂で落ち着いたある情緒を醸し出している。そして、小川通をはじめとする茶道家元の並ぶ町並みにおいて、茶道に関わる人々の日々の生活、茶道具等を扱う営みが、茶の湯の本山である京都の歴史を感じさせている。

※1 武野紹鴎の鴎の表記は「メ」が「品」となっているのが正式である。



写真2-87 茶会の後



写真2-88 小川通の町並み

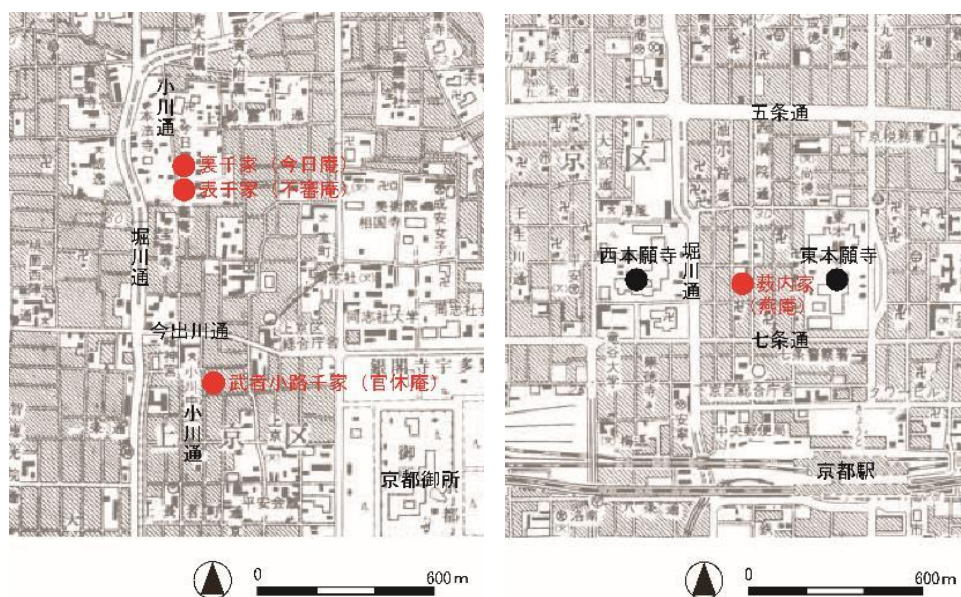


図2-56 三千家と藪内家

(オ) いけばな

神前の依代や仏前に花を手向ける供花を源流に持つ「いけばな」の成立は、室町時代に珍しい花を唐物の花瓶に挿して並べ優劣を競う「花合わせ」や、仏教的行事「法楽」の飾りなどとも、深く関わっていたと思われる。

応永6年（1399）三代將軍足利義満は、完成した北山殿（鹿苑寺）で「七夕花合わせ」を催し、以後幕府において毎年行われる慣例行事となった。頂法寺六角堂の僧である池坊専應は立花の名手と知られ、寛正3年（1462）佐々木持清に招かれ、金瓶に草花を数十枝挿した。それを洛中の好事家が競って見物したと伝えられている。



図2-57 六角堂（頂法寺）と池坊

その後、同じく六角堂の僧である池坊専應は度々宮中に招かれて花を立て、また立花の理論と技術を体系化した「池坊専應口伝」を著し、華道が成立した。

江戸時代初期、三十二世池坊専好（1536～1621）は立花の名人で、禁裏において開催された立花会の指導をし、後水尾天皇の寛永文化サロンの担い手の一人となった。

現在、京都には「池坊」をはじめ、江戸時代中期に興った「松月堂古流」、その後の「正風遠州流」や「専慶流」など多くの流派が存在し、一般庶民に教養として親しまれている。また、現代は大覚寺（嵯峨御流）、仁和寺（御室流）、泉涌寺（月輪末生流）など住職が華道の家元を兼ねていることも京都の特色であり、神社仏閣

での展覧会も盛んに行われている。

京都の寺社等では、神仏に花を献じる「献花」も行われており、華道の源流である「仏前供花」の精神を見ることができる。伏見稻荷大社や三十三間堂では毎年池坊により献花の儀が行われる。和銅年間（708～715）に創建された伏見稻荷大社における朱塗りの外拝殿にて、礼式生けの所作で花が生けられる様子は、厳かでいて華やかな風情を醸し出している。

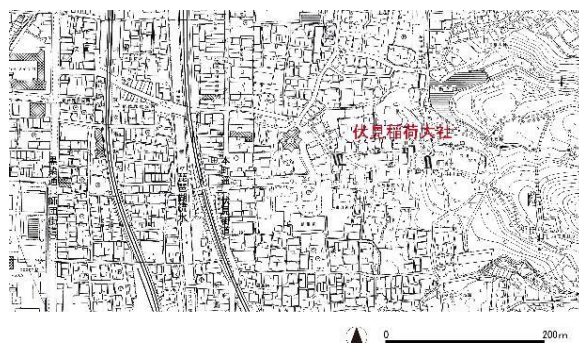


図2-58 献花の儀（伏見稲荷大社）

また、先の「京町家のくらしと地域コミュニティ」の項に示した京町家の中でも、いけばなを嗜む人々が床の間などへ花を飾り、来客者をもてなすなど、人々の間でも日常的にいけばなの営みが行われている。

献花祭などの活動が、寺社等を舞台にして行われ、境内地において華やかな風情を醸し出し、また京町家等での営みにより、もてなしの心を感じさせ、訪れる人々に心の和やかさを感じさせている。

(カ) 美術

京都の絵画の歴史は古く、平安時代に描かれた源氏物語などの絵巻物の「大和絵」、宗教絵画、狩野探幽による御所や二条城の障壁画、琳派を確立した尾形光琳など数多くの優れた絵画や画家を生み出してきた。

近代に入ると、伝統と進取の気風に満ちた取り組みが盛んに行われ、東京と並んで日本の美術界をリードしていった。

そんな中、京都には美術と関わりのある町が形成されてきた。

その一つが寺町通りである。寺町の地に寺院が集められ、寺町といわれるようになったのは

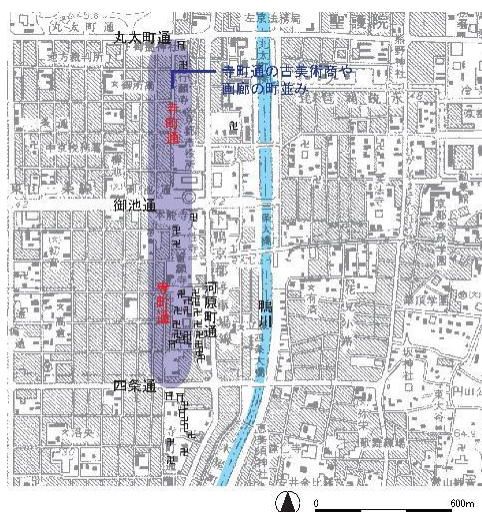


図2-59 寺町通



写真2-91 寺町通の店舗

天正18年（1590）、豊臣秀吉の京都大改造計画の一環だった。秀吉は洛中に散在していた寺院を、東京極大路があった辺りの東側に移転させた。集められた寺院の数は80か寺にもおよぶ。門前町としての体裁が整ってくるに従って、寺町通りの商店街も形成され、17世紀前後から、位牌・櫛・書物・石塔・数珠・挟箱・文庫・仏師・筆屋などの寺院に関連した店が立ち並び始めた。江戸時代初期に成立した「毛吹草」には、寺町通の名産として絵像や木像、紙

表具、屏風といった、美術につながるものが示され、美術の町並みが形成されていたことが伺える。さらに、その他の店も並びだし、現在の寺町通りの商店街の基礎ができたという。現在でも、寺町通りには古美術や古書、日本画、洋画、版画を取り扱う店や、画廊などが先の「京町家のくらしと地域コミュニティ」の項に示した京町家などの歴史的建造物で営まれ、町の風景を形作っている。

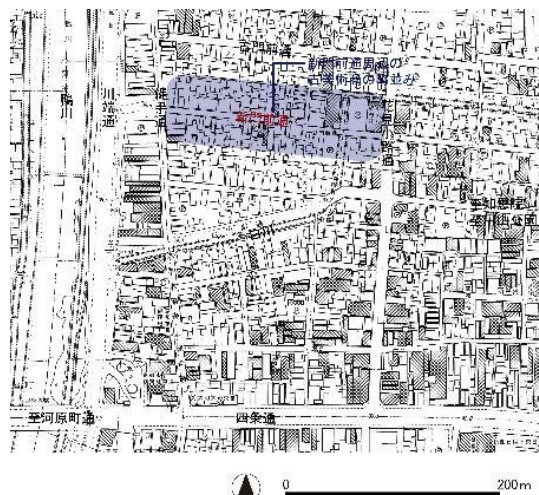


図2-60 新門前

新門前通およびその周辺地区も、古美術のまちとして有名である。この界限は、知恩院の門前町として元禄期を前後して形成され、古くは茶道具商が立地した。円山公園にホテルが建設され、この界限が河原町通りに出る散策道となることで、明治末期以降古美術商が集まり、情緒豊かな町並みが形成された。新門前通は、美術品を扱う同業者町を形成しているが、家主の人格を象徴するように、一軒として同じ家屋がなく、風情を凝らした町家建築で町並みが構成されている。その店先には、古美術商であることを匂わせるような美術品が展示され、町並みに彩りを添えている。

岡崎は、伝統と進取の気風の地として後に示すとおり、京都市美術館をはじめとする文教地区が形成され、文展を前身とする日展が行われるなど、近代以降の日本画と洋画の融合などの革新をはじめとする芸術の振興が今なお続く町である。平安神宮への参道としての神宮道周辺には、多くの画廊があり、芸術の町としての顔を形作っている。